

甘いトモダチ関係

目次

甘いトモダチ関係

5

甘いトモダチデート

253

甘いトモダチ関係

## プロローグ

「なあ、そろそろ、友だちやめないか？」

その言葉は、今まさに大好きなイチゴを味わおうと、期待を込めて大きな口を開けたときに聞こえた。

——シヨートケーキの真っ白なクリームの上に載る、赤いイチゴは芸術品。

東野朱莉はそんな考えを持ち、イチゴをいつも最後まで大事に取っておく。そのため、それを口に入れる瞬間を邪魔されるのは、大変に許し難いことである。

「は？」

ぽかんと口を開けたまま、朱莉は訝しげに発言の主である三宮征司を見た。

彼は朱莉に目も向けず、缶ビールを片手に、眼鏡の奥の凛々しい目で新聞を読んでいる。シャツの首元のボタンを外して袖を捲り、ネクタイは緩められている。そしてソファに深く腰掛け、長い足を組んでいた。

外ではピシッと決めたスーツ姿。くつろいでますと言わんばかりのこの姿は、朱莉の前でのみ晒される。

一方の朱莉はソファの正面に置かれたローテーブルの前に座り、部屋着のスウェットワンピース一枚で、ケーキを食べつつ大好きな二時間ドラマを観ていた。

しかし、せっかくのドラマ鑑賞時間だというのに、征司の言葉のせいで、彼女の意識は断崖絶壁に犯人を追いつめたメイン俳優から逸れてしまった。代わりに、大学時代から十年間友だち付き合いをしている征司をじっと見つめる。

朱莉は、今の征司の発言について考えた。

どういう意味だろう。せっかくこれまで、気の合う友だち同士でいたというのに。こうして仕事帰りに征司が朱莉の部屋へ転がり込み、勝手に冷蔵庫からビールを出してソファに陣取っていても、それが普通に思えるほどの関係を築いてきた。

その関係を、突如「やめよう」などと言われてしまうとは……

ふたりは大学で同じゼミに所属していたことから親しくなった。

男前だが気取らない征司と、快活な朱莉。

ウマが合ったふたりは、なんでも相談し合える友だち関係を保ったまま大学時代を過ごし、同じ会社へ就職した。

知り合って十年。ふたりは今年で二十九歳になる。

背中を丸めながら赤いイチゴを口に入れた途端、朱莉の中でひとつの答えが出た。ミディアムロングの髪をふり乱す勢いで顔を上げた朱莉は、せっかくのイチゴをろくに噛みもせず呑み込んでしまった。

「なにっ？ 絶交しようってことなの？」

朱莉の反応に、今度は征司が考え込む番だった。彼は口を付けようとしていた缶ビールをローテーブルに置き、眉を寄せて朱莉を見る。

「どうしてそんな答えになるんだよ」

「だって、友だちやめるんでしょう？ 絶交ってことじゃない。どうして？ 私、なんかした？」  
自分になにか非があったのか聞き出そうとした朱莉だが、征司の答えを聞くよりも先に、ある考えが頭をよぎった。

「ああ、そうか。もしかして征司、彼女ができた？ 女の子ってアレだよ、彼氏の女友だちと  
かって嫌がつたりするもんね。そっかあ、それじゃあしょうがないかな……。でもさあ、絶交まで  
しなくたって……」

「朱莉の、ドあほっ」

ひとり納得する朱莉の頭に、新聞がパソコンと直撃する。それ自体は薄いものだが、丸めて叩かれれば充分に痛い。

両手で頭を押さえて「痛い〜」と文句を言う朱莉を眺め、征司はフンツと鼻を鳴らした。

「違うだろっ。どうしてそういう方向に持っていくんだ、お前は」

「違うのお？」  
朱莉は頭を押さえたまま目をまたたかせる。そしてその目は、征司の次の言葉を聞いた瞬間、大きく見開かれた。

「友だちやめて、大人の関係になろうって言ってんだよ」

「……はい？」

（なに言ってるのお!?!）

いきなり提案された、友だちやめて大人の関係になろうぜ案。

その衝撃に、朱莉はイチゴどころか、ケーキの味さえ忘れてしまったのだった……

第一章 トモダチ関係が変わる夜

突然の告白から一週間後——。そろそろ梅雨入りの予感がする六月初旬。

今日は、薄い灰色のベールが空一面を覆っている。

憂鬱な季節の前触れに、気持ちが沈む時期である。しかしそれとは別に、誠和医療メデイカル営業課のオフィスには、張りつめた空気が漂っていた。

「つまりお前は、停滞を望むわけだな？」

オフィスに静かに響くその声は、ひどく冷たく聞こえる。

問いかけの形でありながら、返答を求めている気配はない。まるで断定しているかのような口ぶりだった。

「先月の営業成績を維持したいとは、それ以上を目指さないという意味にとれる。お前は先月の数字で満足してしまった。そういうことだろう」

上司である征司の言葉に、部下の顔から血の気が引いていく。ついさっきまで、先月の営業成績を自慢げに語っていた部下の口は、半開きになったままピクリとも動かない。

「それなら、お前にはこれ以上の成長を見込めない」

威圧感とともに言い渡された言葉に、部下は恐怖に引きつった表情を浮かべた。

「もももつ、申し訳ありませんっ、課長っ！ す……、すぐ……すぐっ、目標を立て直してまいります！」

声どころか膝まで震わせた部下は、深い礼をした直後、俯いたまま自分のデスクへと走っていく。

部下を恐怖に陥れた征司は、なにもなかったかのように中指で眼鏡のブリッジを上げ、ふうっと息を吐いた。そうしておもむろに周囲へ視線を向ける。彼の視界に入った課員たちがびくりと震えた。

そんな彼らの気持ちなど歯牙にもかけず、征司はひとこと言い放った。

「東野君、お茶」

「はい、課長」

朱莉の返事と共に、場の空気が少し和らぐ。営業課の鬼課長、三宮征司が営業アシスタントである東野朱莉にお茶を頼むのは、彼の機嫌が直った証拠なのだ。

征司がデスク上のパソコンに視線を移すと、課内の空気もやつと平常に戻る。

朱莉としては、事あるごとにお茶を要求する征司に不満はあるものの、専属お茶係を引き受けておかないと征司の機嫌はさらに悪くなってしまう。そうなれば、また、オフィスに先ほどのような緊張が走る。

医療機器や理化学機器の販売、輸出入、病院やそれに関連する施設設備のトータルプランニングを主な事業内容とし、創業百年という実績と信頼で全国主要都市に営業所を持つ、誠和医療メデイカル本社。

征司と共にこの会社に入社して七年。寿退職が多いせいで、朱莉は女子社員の中ですでに古株扱  
いになっている。

そんな彼女はオフィスの平和を守るため、そして鬼上司であり親友でもある征司のために、彼が  
希望のお茶を淹れるべく一日に何度も給湯室に出入りするのだ。

溜息まじりにデスクを離れようとすると、隣のデスクで新人の川原望美が、首をすくめてこちら  
を見ているのに気づいた。

本来ならば、お茶を淹れるのは新人である彼女の仕事。それなのに、大先輩にそんな仕事をさせ  
ていいものなのかと、気にしているのだろう。

(別に構わないのに)

そんな彼女を安心させようと、朱莉はにつこりと笑みを浮かべる。先輩の笑顔を見て、望美は  
ホッとした表情をして仕事に戻った。

望美が気にする必要はない。征司のお茶淹れは、朱莉の仕事と決まっているようなものだ。

目に優しいアイボリーの壁に囲まれた室内には、営業担当やアシスタントを含め、二十人ほどの  
席がある。二台向かい合わせに三列並んだデスクの一角では、先ほど営業成績の件で叱責を受けた  
社員が、半べそをかきながらパソコンに向かっている。

彼は先月、根気よく営業を続けていた病院から、患者の輸送などに使う新型のナーシングス  
トレッチャーを、まとめて契約してもらった。そのおかげで月の成績が一気に伸びたのだ。

彼は入社して三年だが、今までそんなに大きな数字を出したことはなかった。

本人はもちろん嬉しかっただろう。このレベルを自分の目標にして、毎月頑張ろうと目標を立て  
ていたに違いない。

——しかし、鬼の三宮は、それを許さなかった。

それどころか考えが甘いと叱咤し、さらに上を目指せと気合いを入れたのだ。

(だけどさあ……、もう少しくらい余韻に浸らせてあげたっていいんじゃない?)

まとまった大きな契約など滅多に取れるものではない。ちようど病院側が入れ替えを検討しよ  
うとしていたところに運よく入り込めただけとはいえ、それだって、定期的に顔を出して説明を続け  
た彼が信用してもらえた証拠。立派な成果である。

(まあ、征司はそれ以上のことができる男だからね。このくらい喜んでたら駄目だって、奮起さ  
せたいんだろうなあ)

征司は入社時から要領も営業成績もいい、仕事ができる男だった。

新卒で営業部に配属されて以来、新規で大きな契約を何本もとり、真面目かつ堅実な仕事ぶり  
で大学病院からの信頼も厚い。いつもの厳しい表情は一見怖そうに見えるが、それはそれで男前だと  
看護師たちにもウケがいい。

あつという間にエリートコースに乗った征司が課長に昇進したのは、昨年、二十八歳のとき。

彼の課長昇進に、不満をこぼす者など誰ひとりいなかった。

一方で朱莉は、征司と同じ大学を出て同時に入社したのに、特に役職に就いているわけでもない。  
朱莉より年上の女性社員がいない営業アシスタントたちの中で、古株と認識されているだけ。血気

盛んなキャリアウーマンならば「男女差別だ！」と叫びかねない状況だが、なんといっても歴史のある会社だけに体質は古い。それを証明するように、女性の管理職はひとりもない。

しかし、それがこの会社のやり方なのだと言朱莉は割り切っている。

そして、古株の彼女には役割があった。

鬼課長のお守役――

仕事も容姿も完璧な鬼課長。そんな彼に意見ができる者は、課内では朱莉のみ。そのせいだろう。いつの間にか、そう呼ばれるようになっていた。

「はい、お茶どうぞ。課長様」

少々嫌みっぽい口調だったせいも、キーボードを打っていた征司の手がピタリと止まる。眼鏡の隙間からじろりと三白眼を向けられてしまった。とはいえ他の課員が恐れるその目つきは、朱莉にとっては特に恐怖を感じるものでない。いい男なんだからそんな目はしないほうがいいのに、などと同情してしまうくらいだ。

もっとも征司は朱莉を怖がらせようとしてそんな目をするわけではない。単なる彼の癖だった。

「ありがとう、東野君」

征司は中指で眼鏡のブリッジを上げ、礼を口にして湯呑みに手を伸ばす。お茶ならお茶、コーヒーならコーヒー。彼はその時々によって飲みたいものを明確に指定してくる。

征司にとっての「お茶」は、日本茶のことだ。そして指定された際には、彼お気に入りの

熱湯玉露を淹れなければならない。これはネットショップのお茶屋さんから征司が個人的に購入しているものである。もちろん、会社の経費ではない。

湯呑みを傾げる彼は無表情だ。しかし、他の誰にも分からなくても、朱莉にだけは分かることがあった。

（おーおー、喜んでる喜んでる）

眉や目、口元の微妙な変化で、彼女には征司の機嫌が読める。

これもすべて、十年來の親友関係があつてこそだろう。

満足そうな征司を確認してから、朱莉はお茶を淹れたあとに放置した急須などを片付けるべく、給湯室へ戻ろうとした。

しかし湯呑みに口を付けたまま、征司は朱莉に物言いたげな視線を向ける。

（な、なに……、なにが言いたいの？）

踵を返しかけた身体を戻し、さらに身を屈めて征司を覗き込む。

「なに？」

彼がこういう目をするのは、プライベートの話をしたときである。朱莉は眉を寄せ、少しぞんざいな口調で尋ねた。ただしその声はとて小さい。

「ん……、朱莉さあ、しばらく俺の部屋に来てないよな……」

「今週に入ってからには行ってないかなあ。だって、ずっと征司がうちに来てたしき。四日くらい……」



朱莉はそこでハッと、ある事実に気づく。四日間も行っていないということは、彼の部屋がとんでもないことになっている可能性がある。

「わ、分かった……。今日の帰りに行く。征司は？ 残業になりそう？」

「んー、今日会う約束だったドクターがいたんだけど、緊急手術が入ったらしくて面会予定が延びた。少し残業すれば、すぐに帰れると思うけど……」

征司はそこまで言っ言葉を濁し、なにか言いたそうな気配を匂わせる。

彼の言いたいことがよく分かる朱莉は、今日一日、鬼課長をご機嫌にさせるための魔法のひとつを唱えた。

「……分かった。……晩ご飯、ハンバーグでいい？」

——その瞬間、鬼の目尻が下がった。

彼はスーツから札入れを取り出すと、一万円札を一枚抜き出し、朱莉の手を取ってポンッと渡す。「皆にアイスでも買っついで。その他の買い物は、終業後に頼むよ」

課員達にアイスを買うために渡されたように聞こえるが、本当の目的は、夕飯の買い物をしてもらうことである。

夏の夜には、着流しで冷酒でもたしなんでいそうな鬼課長の好物。それが十年來の女友だちの作ったハンバーグであることは、朱莉以外の人間は誰も知らない。

もし言ったところで、冗談だと思われて笑われるだけだろう。

「ありがとうございますっ、かちよーっ」

朱莉は棒読みで礼を口にすると、オフィス内を見回し、一万円札を掲げて叫ぶ。

「みんなー、三宮課長がアイスを買っつてくれるそーですー！」

その途端、さっきの緊迫感などなかったがごとくオフィスは盛り上がる。

鬼の三宮を恐れる社員たちは、感謝の気持ちを込めて征司の機嫌をよくしてくれた朱莉を崇めた。鬼課長のお守役の株が、大いに上がった瞬間だ。

「あーあ……」

仕事を終えて征司の部屋へやってきた朱莉は、深い溜息と共に室内を見回す。

いったい、これは何度めの溜息なのだろう。もう自分でも分からなくなった。落胆したって解決しない。それは分かっている。

だが朱莉は、己の失念を悔やんでいた。

「どうして、四日間も放っつておിച്ചったんだろう……」

そう呟いて肩を落とした瞬間、手に持っている四十五リットル用の透明ゴミ袋の中で、ビールの空き缶がガラガラと音を立てる。

ゴミ袋の中身はすでに半分埋まっているものの、この中に入るべき缶は、まだ大量に存在しているのだ。

——この、荒野のような部屋の中に。

「少しは自分で片付けなさいよ、あのモノグサ男!!」

叫んではみるが、当のモノグサ男はまだ帰宅していない。特別な理由がない限り、彼の残業は毎日のことだった。

デザインーズマンションの一室とは思えないほど散らかった部屋。ここがスッキリと片付き、テーブルに朱莉お手製のハンバーグの皿が載った頃——彼女の機嫌を取るためのイチゴショートケーキを土産に、この部屋の主は帰ってくるだろう。

鬼の三宮……いや、十年来の男友だち、三宮征司が。

「パンツくらい、脱いだら洗濯機に入れておきなさいよおっ」

床の上には、ビールの空き缶、その下には新聞、さらにその下には放置されたトランク。不自然な裏返し方から、明らかに脱いだまま放置されたものだと分かる。朱莉はトランクを驚掴みすると、思い切り壁に投げつけた。

だが、どんなに怒りに任せてそれを投げつけようと、しよせんは布切れ。投げつけられたトランクはパサリと壁に触れ、へろへろと床へ落ちた。

「ああ……、もう……」

朱莉の怒りに付き合ってくれる気配など、みじんも感じられないトランクに引きずられ、彼女の勢いも萎えていく。

つい慌てて会社帰りにそのまま来てしまったが、ここまで散らかっているのだったら、一度自分の部屋へ帰って着替えてくれればよかった。白いブラウスにクリームイエローのタイトスカートでは、汚れが気になって動きづらい。掃除なら、いつものスウェットワンピースで充分なのだから。

(思いつきり散らかってるなら、最初から散らかってるって言いなさいよ！)

とはいえ、今更怒ってもしょうがない。

「早く片付けよと……」

一度諦めてしまえば動きは速い。朱莉は手慣れた様子で缶を再び集め出した。

いったい、誰が信じてくれるというのだろう。

部下のネクタイの歪みひとつ許さない厳しい三宮課長——。モデル張りの容姿と仕事の堅実さで、女性からいつも好意的な眼差しを向けられている彼が……

実は、プライベートではコーヒーの一杯も淹れようとしない無精者などと……

「あいつ、ビール以外のものも、ちゃんと身体に入れてたのかしら」

そう呟く朱莉は、本や雑誌、新聞などを分別しながら、床に散らばっているゴミを集めていく。紙ゴミなどはあるが、食べ物のゴミが見当たらない。

(面倒くさがって食べてないと見た)

征司はこの四日間、昼は会社の社食で食べ、夜は朱莉の部屋で菓子やつまみに手を出していた。自分の部屋へ帰ってからは、ビールを飲んで寝てしまっていたというところだろう。この調子では、朝食も食べていないのかもしれない。

「朝ご飯抜いてるくせに、よく仕事で頭回るよね。』ご飯は一日の活力』って言ったの、あいつなのにさ」

順調に片付けを進めていた朱莉の手が、ふと止まる。彼女の脳裏に、その言葉を聞いた日のこと

が甦る。

(もう、五年も前になるんだ……)

一瞬気持ちが悪くなったが、朱莉は勢いよく頭を振り、気を取り直して片付けを続行した。早く掃除を終わらせて、ハンバーグの用意に取りかからなくては。手を止めている暇はない。

十四階建てデザインーズマンションの三階。そこに、征司の部屋はある。造りはLDKだが、面積はひとり暮らしにはもったいないほど広い。

学生時代はふたりとも大学近くのアパートに住んでいた。しかし就職する際、会社から遠すぎると考えて引越したのである。

現在、朱莉が住むマンションは、征司のマンションから徒歩十分の位置。

『女のひとり暮らしは、なにかと大変だったり厄介だったりするだろ。もしものためにも、部屋は近くにしようぜ。……まあ、お前に限って、もしも、なんてないかもしんねーけど』

心配しているのかいなのか不明な征司の言葉に乗せられ、お互い行き来がしやすい物件を探していたところ、今のマンションを見つけた。

朱莉側は問題なかったが、入居当時まだ社会人一年生であった征司には、この部屋は贅沢な物件であった。朱莉はその点が気になり、彼女のマンションから徒歩三十分圏内、なおかつ手ごろな家賃の別物件をすすめた。だが、「遠すぎる」と征司は納得しない。

朱莉は運転免許すら持っていないが、彼はその当時から車を所有していた。車を使えば、朱莉の

部屋へ来るのに手間はかからないと言うと、逆に朱莉が征司の部屋に来づらくなるから駄目だと言う。

もしか、本気で女のひとり暮らしを心配してくれているのだろうか……

不覚にもときめいてしまった朱莉の胸の内を知ってか知らずか、結局彼は現在の部屋を契約し、大学時代に家庭教師のバイトなどで荒稼ぎをした貯金で、見事に新人時代を乗り切ったのだ。

その数年後、出世が早かった彼は、無理なく家賃を払えるようになった。

『朱莉の部屋と近いし、パソコンの調子が悪いだの男手が欲しいだのとときもすぐ行ってやれるし、便利だよなー』

かつて嬉しそうにそう口にした征司に、いつでも力になってやりたいのだという篤い友情を感じて、感動を覚えた。

仕事を頑張ってスピード出世したのも、朱莉の傍にいるための部屋代を捻出するためだったのではないか、とさえ思ってしまう。

——だがそれは……朱莉も征司の部屋へ通いやすいという意味……

つまり、いつでも呼び出せる。

いつでも食事を作りきてもらえる。

いつでも掃除をしにきてもらえる。

そんな思惑が征司にあったかどうかは不明だが、朱莉はなにかと彼の世話を焼くことになったのだ。そして今日もまた、恐ろしいほど散らかっていた部屋を片付けた。ゴミだらけだった空間は、

デザインナースマンシヨンの一室らしく、シンプルだが洗練された居住空間に変貌を遂げた。

「さすが私。手慣れたもんだわ」

掃除機片手に室内を見回し、朱莉はふんつと鼻を鳴らす。最初こそ四日間も放置してしまったことを後悔したものの、そこは征司の部屋をほぼ十年間片付け続けてきた彼女のこと。放置されたものを戻す場所など心得ている分、整理整頓も速い。

「今日は水曜だから……、二日置いて、次は土曜にでも見にくるか……」

次回の予定を呟きながら、掃除機を戻しに向かう。二日、もしくは三日置きに征司のハウスキーパーになるこの生活は、大学時代から続いている習慣のようなものだ。征司の無精ぶりに苛つくのは今更という感じである。

会社勤めを始めて彼が昇進してからは、散らかり具合もグレードアップしている。あまり態度には表さないが、それだけ仕事も忙しくなっているのだろう。

会社では鬼課長のご機嫌をとってくれるお守役。

そして、プライベートでも無精男のお守役が、すっかり当たり前になってしまった。

「もしもお土産忘れたりなんかしたら、ハンバーグ半分取りあげてやるんだから」

朱莉はひやひやひやと、ひとり不気味な笑いを漏らしながらそう企む。直後、笑いを鼻歌に変えて、彼女はキッチンに常備している専用エプロンを身に付けた。

なんだかんだと文句は出るが、この生活は楽しい。それは、征司が気兼ねなく接することができる男友だちだからだ。

いつか彼に恋人でもできればこの役目は終わるのだろうが、今のところその気配はない。また、朱莉もそれは同様である。

まだしばらく、無精男のお守役は、続きそうだ。

「おーっ、いい匂いだなっ」

笑みを浮かべて征司が帰ってきたのは、ちょうどハンバーグが焼きあがった頃だった。

カバンを小脇に抱えてキッチンに入ってきた彼の右手には、高級洋菓子店のケーキの箱。朱莉は予想通りのお土産を確認し、ハンバーグを半分取りあげてやろうかという企みを、こっそりと頭から消す。

「ちょうど焼けたところだからさ、着替えといでよ。その間にテーブル用意するから」

「ああ、ほれ、ケーキ」

「わーい、サンキューっ」

朱莉は差し出されたケーキの箱を両手で受け取り、満面の笑みを浮かべる。自作のハンバーグより食後のケーキが楽しみな朱莉だが、そんな彼女に征司が何気なく言った。

「なんか、メシの時間に帰ってきて土産なんか渡してると、新婚家庭みたいだな」

その瞬間、朱莉の笑顔が固まる。が、すぐに気を取り直し、大笑いしながら彼の背中をバンバンと叩く。

「なに言ってるのよお、甘ったるいこと言っちゃって！ どうした？ なんか仕事で辛いことでも

あった？ 甘やかしてほしいのか？ しょーがないなあ、あとで耳掃除でもしてあげるよ!!」

朱莉は、今の言葉を完全に冗談としか捉えていなかった。あまりにも力を入れて叩いたので、さすがに征司がよろける。

しかし、叩きすぎだと文句を言うでもなく、征司は右手中指で眼鏡のブリッジを上げ、ニヤリと口角を上げた。

朱莉が饒舌になるのは彼女が照れているときだと、征司が知っているからだろう。

朱莉が征司の性格を把握しているように、征司も朱莉の性格をよく心得ている。ご機嫌を取る方法、喜ばせる方法。そして照れさせる方法も。

時々、それを上手く利用されているような気がする朱莉ではあるが、相手が征司だと思えば、特に嫌な気持ちにはならない。

征司は照れる朱莉を眺めてから、ネクタイを緩めつつ口を開く。

「じゃあ、着替えてくる。仕事から帰ってきて、猛烈にメシを食いたいと思うのも久しぶりだ」

「大好きなハンバーグだからでしょ。あつ、朱莉ちゃん秘伝のケチャップソースも作っておいたからね」

「それ、白いご飯にかけて食うと美味いよな」

「この、お子様味覚っ」

「いいだろ。ハンバーグもソースも、美味いもんは美味いよ」

「はいはい。そんなにハンバーグが好きなら、毎日外で食べればいいのに。近くのハンバーグレス

トラン、美味しいじゃない」

朱莉はキーキの箱を冷蔵庫の中に大切にしまい、夕食の準備を再開した。お皿を出しながら口にした言葉に返答はなかったが、答えを期待していたわけではないのでそのまま会話は途切れる。

彼女の様子を横目で見ながら、征司はキッチンを出ていった。

朱莉がリビングを覗くと、征司は小綺麗になった室内を眺め、笑みを浮かべている。

「なーに、突っ立ってんの？ テーブルの用意ができるまでに着替えてこなかったら、征司の分まで食べちゃうからね」

それを聞いた途端、征司が着替えに走ったのは、言うまでもない……

征司には「ハンバーグ食べちゃうよ」効果が絶大なのだ。

三分とかわからず、彼はストライプの綿シャツにジーンズというラフないでたちで、リビングに戻ってきた。

「手伝う、手伝う」

征司は朱莉が運ぼうとしていた盛り付け済みの皿を受け取り、嬉々としてリビングテーブルに並べていく。そんな彼を見てみると、朱莉まで愉快的な気持ちになってきた。

「せいじくん、エライ、エライ」

「子どもかっ」

「ハンバーグが好物な時点で、お子様」

そのお子様に缶ビールを二本渡し、用意は終了。朱莉はエプロンを冷蔵庫横のフックに戻し、征

司のあとを追ってテーブルに着いた。

ふたり同時に「いただきまーす」と声を発してから、朱莉だけは征司に向かって「はい、どうぞ」と返事を返す。

楽しい夕食の始まりである。しかし、食べ始めてから数分足らずで征司から声がかかる。

「朱莉、ハンバーグおかわりー」

予想通りの注文を受け、朱莉は笑顔で立ち上がった。

征司の皿からはハンバーグだけが綺麗に姿を消していた。

「はいはい、ちよつと待ってよね」

そう言いながら箸を置く朱莉本人は、まだ食べ始めたばかり。ご飯やお味噌汁どころか、ハンバーグの付け合わせのブロッコリーがひとかけ減っただけだ。

こんなに早々と食事を中断させられたら、普通は気分を悪くして然るべきだろう。だが、征司の食事パターンを心得ている朱莉は、慣れたものであった。

キッチンに入って、あらかじめ用意してあったガラスフードつきの皿を手にテーブルへ戻る。

「待たせてないけど、お待たせー」

おどけながら取ったフードの中には、上に載せたチーズがちょうどいい具合に溶けたハンバーグがひとつ。

「はい、今度はゆっくり食べるのよ。ほら、ブロッコリーも食べなさいっ。残したら、もうハンバーグ作ってあげないからねっ」

まるで母親のような小言を言って征司の皿にハンバーグを移し、さらにその上からテーブルに用意していた朱莉特製ケチャップソースをかける。朱莉の一連の動きを見届けてから、征司は満足そうに頷いて、箸でブロッコリーを摘みんだ。

「分かってるって。ちゃんと食うよ」

そう言って口へ放り込むものの、さほど嘔まずにごくりと呑み込む。ほんの数秒味わうのも嫌なほど、彼はブロッコリーが苦手だった。

しかし、社食や外食では残しても、朱莉が付け合わせにしたときだけは必ず食べる。それはひとえに、「残せば朱莉がハンバーグを作ってくれなくなる」からだ。

食事の最初に、それだけ執着しているハンバーグだけを食べ、おかわり分は他のものと一緒に食べる。そのパターンが分かっている朱莉は、最初からおかわり分も一緒に焼き、すぐに出せるようにしている。

どうせおかわりをするのなら、倍の大きさでひとつ焼くか、最初からお皿にふたつ盛っておけばいいのかもしれない。

けれどなんとなく皿の上のバランスが悪くなってしまふような気がして、朱莉の中でその案は却下されていた。

「朱莉のメシ食うとき、一日の疲れが吹っ飛ぶよな」

しみじみとそう言って、征司はホッとしたように笑顔を見せる。

ハンバーグを前にご機嫌な彼の表情は、鬼の三宮の異名をとる男とは到底思えないほど穏やか

だった。

「それは嬉しいけど、あんた、ここ最近ちゃんとご飯とか食べてたの？　なんかさあ、ビールと紙のゴミしかなかったよ」

ガラスフードと皿を片付けてからもう一度座ったところで、朱莉は自分の分の缶ビールを開ける。他のメニューのときは最初から開けておくが、ハンバーグのときだけは、落ち着いて飲めるように征司のおかわりを用意したあとに開けることにしている。

「んーっ、ここところずつと、残業後はお前の部屋に行ってたからな……。面倒で食ってなかった」

「夜も食べない、朝も食べない、昼だけでよく持つわね。大きなナリしてるくせに」

「背が高いと言え。——朝は喫茶店でモーニング食ったり、ハンバーガー食ったりしてるし」

「贅沢者ぜいたくものっ。いっつも言ってるけどさ、食パンでも買って焼いて食べなよ。トースターで焼くくらいできるでしょう？」

パンを焼くするなど、ボタンひとつで終わる。誰にでもできることではないかと、多くの人が言うだろう。

……しかし、そんなことを思っではいけない。

できてもやらないし、やりたくない。そんな人間が存在することを、朱莉はよく知っていた。

自分で口にした提案ではあるが、征司の答えを聞くまでもなく、ほとんど諦めている。征司は聞こえないふりで食事に集中していた。

(ホント、会社の人間には見せられない姿だわ)

朱莉が作った食事を、嬉しそうに食べてくれる征司。

そんな彼を、朱莉は決して嫌いではない。

友だちが喜んでくれている、そして自分を頼りにしてくれている。それは嬉しいことであった。

部屋くらい自分で片付けろと文句を言いつつも、友だちに頼られると嫌とは言えず張り切ってしまう。それが朱莉だ。

(友だちが喜んでいるんだもん。いいじゃない……)

征司の生活態度を、何度心配したか分からないが、結局朱莉の考えはいつもそこに落ち着いてしまう。

大事な友だちが喜んでいいるのだから、それでいい、と。

「ん？　どうした、朱莉？　食わないなら俺がもうぞ」

ビールの缶に口を付けたまま考え込んでしまったため、朱莉の箸はしは動いていない。すかさず征司の箸が朱莉のハンバーグに刺さりそうになるが、彼女は皿をずらしてその攻撃をかわした。

「食べるわよっ。あんたは大人しくおかわり分でも食べてなさいっ」

「……土産みやげのショートケーキ、お前の分、二個あるんだぞ……。でっかいやつ」

「……半分あげる」

三度の飯よりケーキ好きの朱莉。彼女はその至福のために、食事を減らす手段に出た。

その変わり身の早さに笑いながら、征司は朱莉のハンバーグを箸で半分に割る。手をつけていな

いほうを取るのが普通だろうが、なぜか彼は朱莉が食べていたほうを自分の皿に移した。

「朱莉はさあ、本当にケーキが好きだよな」

「甘くて美味しくて幸せになれるのよ。これ以上いいものはないじゃない」

「大学の頃も、そんなに好きだったっけ？」

朱莉は一瞬黙り込む。しかし、征司はなにか反応が欲しかったわけではないらしく、返答を促すことなく食事を続けた。

今日は、色々と余計なことを考えてしまう。朱莉は気を取り直そうと、大きく息を吐いてからまたビールの缶に口を付ける。すると、征司が何気なく聞いてきた。

「朱莉、今日泊まるだろ？」

「え？ なんで？ 明日も会社あるし、帰るよ」

「泊まってけよ。久しぶりに来たんだし」

「なによ、相談事でもあるの？ それとも、『観たい』って言ってたDVDを借りといてくれたの？」

「せっかく恋人同士になるんだし。一緒にいたっていいだろ」

ちようどビールをおおっていた朱莉は、突然の恋人宣言に驚き、盛大に咳き込んでしまった。

「おい、どうした？ 大丈夫か？」

原因を作った張本人は、あつけらんとしていた。征司はさして慌てもせずに立ち上がり、彼女の横に立って背中をぼんぼんと叩いた。

「ビールが変なところに入ったのか？ 相変わらずだな、そんなに慌てて飲まなくても……」

「へ……、変なこと言うからでしょうっ！」

だいぶ落ち着いたが、まだ喉に不快感が残っている。朱莉は涙目になりながら征司を見上げた。

「いきなりおかしな冗談言わないでよ、まったくもうっ」

「冗談って、なにが？」

「なにが？ って聞きたいのはこつちよ。なんなのよ、一緒にいてほしいなら素直に言いなさいよ。今日は帰ってきてからなんか変だよ。なにかあったの？ 分かった分かった。悩みなら一晩中聞いてやるから、そんな冗談言わなくても……」

驚きと焦りと照れが、朱莉を饒舌にする。彼女は思いつくまま言葉を口にしますが、それを止めたのは征司の指先だった。彼は、朱莉の唇に人差し指を当て、「黙って」と言わんばかりに優美な微笑みを浮かべる。

（ちよっ……！！ 反則っ……！！）

朱莉はさらに慌てながら、心の中で文句を言う。冷たく厳しい表情が特徴的な征司は、クールな男前でもある。そんな男がニコリと微笑んだら、女として鼓動を速めずにはいられない。

「朱莉、俺さ、この間言っただろう？」

彼の声までもが色気のあるものに聞こえ、朱莉は動揺する。

「……そろそろ、トモダチやめようぜ、って」

「だ、だって……、あれは……冗談で……」



一週間前、朱莉の部屋で言われたあのひとは、大好きなイチゴショートのを、まるっと忘れてしまうほどの衝撃を与えてくれた。

十年來の友だちに大人の関係を求められて、気軽に「うん」などと返事ができるはずがないではないか。

だから朱莉は、彼の言葉に答えることなく笑って誤魔化したのだ。

そのときは、征司もそれ以上話を進めてこなかった。だからあの話は冗談のまま終了したものだと思い、あえて考えないようにしていたのに……

「——冗談のわけがないだろう……」

ふいに、朱莉の唇を押さえていた指が離れる。

そして、次に朱莉の唇を覆ったのは、征司の唇だった。

征司とキスするのは、もちろん初めて。

いや、そもそも誰かと唇を合わせるといふ行為も、何年ぶりだろう。——おそらく、五年以上はなかった……

そんな余計なことを考えていたおかげで、朱莉は征司を押し退けることができなくなってしまった。

「ちよっ……、征っ……」

それでも顔を引こうとしたが、顎を強く掴まれ、離れることを許してもらえない。

征司はキスをしたまま、朱莉が手にしていたビールの缶を取り上げてテーブルへ置く。朱莉の両

手は、驚きのあまり、缶を取り上げられた状態から動かせない。そんな彼女の身体を、征司の片腕が抱き寄せた。

(な……なんなのっ……)

身体が固まって動かない。

まるで彼を受け入れたがっているかのように、ただ彼に身を任せてしまっている。

やがて朱莉の口内に征司の舌が入り込み、互いの吐息がまざり合う。ふわりと感じるビールの苦みさえも甘く感じてしまうのは、なぜなのだろう。

「……お前、随分と大人しいキスするんだな……」

一度離された唇から漏れる囁き。その言葉で急に恥ずかしくなった朱莉は、征司から離れるため彼の腕の中で身をよじった。

「ちよっ……、離しなさいよ……」

「ぶっっっ」

「どうして、って……、あんたねえ……」

『大人の関係になろうぜ』って言ったとき、お前、嫌だって言わなかっただろう？ だから、俺はすっかりそのつもりでいたんだけど」

「だって、あれは冗談だど……」

(冗談じゃなかったのお!?)

朱莉は呆然と征司を見つめた。

眼鏡の奥にある眼差しは真剣で、どこか色っぽくもある。

こんな彼を見るのは初めてだ。朱莉は自分の胸の鼓動が速くなるのを感じた。

「と、とにかく……、変なこと言わないですよ……。十年も友だちやって、今更そんな……」

「十年も友だちやってたから、もう飽きた。でも、朱莉と離れる気はこれっぽっちもないし、だとしたら、大人の関係になるしかないだろう？」

「なっ、なによお、そのわけ分かんない理屈はっ。『飽きた』ってなんなのよ。友だちは友だちでいいじゃないの」

「だからっ、俺は、友だちなんかやめたいんだよ」

「私はあんたと、いい友だち、でいたいわよっ」

「俺はもう嫌なんだっ」

まるで駄々っ子みたいだった。いつもの征司らしくない態度に、朱莉は驚いて抵抗できなくなってしまう。それをいいことに、征司は再びキスをしてきた。

(どうしてそんなに、ムキになるのよ！)

なぜ征司は、いきなりこんなことを言い出したのだろう。

なぜこんなに、感情的になるのだろう。

(友だちで、いいじゃない……)

征司を突き離すことができないまま、朱莉は段々胸が苦しくなる。

(どうして友だちのままじゃいけないの……。もう、あんな思いするの、嫌なのに……！)

強く閉じたまぶたの内側に、涙が滲んだ。

頭の中に思い出したいくない過去の光景が溢れ出し、朱莉の心を支配しようとする。

このままでは本当に泣き出してしまいそうだ。そう感じたとき、征司が囁いた。

「お前……、俺が嫌いか……？」

朱莉はゆっくりとまぶたを開く。

目の前には、どこか不安げな彼の顔があった。普段は厳しく強気な表情が多いだけに、彼のこんな態度には、罪悪感を覚えて胸が痛む。

眼鏡越しの双眸は彼女の答えを待っている。朱莉は戸惑いながらも彼の質問に答えた。

「嫌いなわけ、ないでしょう……。嫌いだったら、こんなに長く友だちなんかやってないし……」

「じゃあ……」

「で、でもね、いくら友だちとして上手くいったって、恋人になっても上手くいくかなんて……」

「いく！ 今まで俺たち、喧嘩らしい喧嘩もしたことがないだろう？ したって、十分後には仲直りしてたし」

「で、でもっ、ほらっ、ただ友だちでいたときの相性と、恋人みたいになっちゃったときの相性って違うものだし……」

「分かった」

征司の指が、再び朱莉の言葉を遮る。彼女の唇に当てられた指は、半開きになっていた上唇を軽く弾いた。

「じゃあ、試しにセックスしてみようぜ」

「……は……？」

「一回してみれば、少なくとも身体の相性がいいかは分かるだろ。それで相性がいいって思ったら、ごちゃごちゃ言わないで観念しろよ」

「なっ……、なに言ってくれちゃってんのよおっ!!」

カアツと顔が熱くなる。一気に体温が上がり、眩暈めまいまでした。

しかしここで自分を見失うわけにはいかない。

こんな無茶苦茶な理屈を放っておいては、十年來の友だちとセックスをすることになってしまっ  
てはないか。

「わっ、分かったっ！ あんた！ 手近で済ませようとしてるな？ でもそれって、いくらなんでも私に失礼だと思わないの!？」

「ドあほっ」

朱莉の口にあてられていた指が、彼女の下唇を摘つまむ。そうして彼は呆ぼろれたと言わんばかりに息を吐き、衝撃しゅげきの事実を明かした。

「手近てぢかもなにも、俺はお前しか眼中に入れてない」

「なっ……！」

ここまで言われては、恥はずかしいを通り越して、呆然ぼうぜんとしてしまっ。

友だちだと思っていた男に恋人になろうと言われて、お試しセックスを提案され、なんともスト

レートな告白までされてしまった。

(なっ……なんて日なのっ！)

言葉も出ない朱莉を立たせ、征司は彼女の手を引いて歩き出す。

朱莉は躓すきそうになりながらも足を進めたが、向かっている場所が寝室であることに気づき、焦あせって立ち止まった。

しかし次の瞬間、ふわりと抱き上げられて寝室へ運ばれ、ベッドへ放り投げられてしまった。

「きゃっ！」

ベッドの上で朱莉の身体が弾はむ。すぐさま、征司の身体が彼女の上に覆おいかぶさってきた。

「ちょ……、せ、征司っ」

「絶対に相性がいいはずだから、安心しろ。恋人になってくれって、泣いて頼みなくなるくらい感じさせてやるよ」

「なっ、なんなのよお、その恥ずかしい自信はっ。あんた、そんなに自信あるの？ い、意外と遊

び人だったんだ……」

「ド、あーほっ」

苦笑いをした征司が、ブリッジに指を当てて眼鏡を上げる。その手で乱れた朱莉の前髪を掻かき上げ、戸惑とまう彼女の瞳を見つめた。

「俺はな、朱莉を友だちとして見られなくなったときから、お前以外の女に欲情なんかしなくなっ  
たんだよ……」

意味深な言葉が、朱莉の身体を震わせる。

そして彼の唇が、熱っぽい吐息と共に、朱莉の唇に重ねられた。

(友だちに見られなくなったって、なに……)

征司の言葉は、分からないことばかりだ。

友だち関係を否定したところから始まり、ここに至るまで彼の口から出た数々の言葉。

身体の間係を持ちたいだけなのではないか。そんな疑いを持った朱莉に彼が明かした気持ちは、まるで愛の告白のように聞こえた。

(……嘘……)

今までずっと、いい友だちだった。

どんな相談でもできて、どんな泣き言でも言えて、お互いを理解して思いやれる。

飲み会で酔い潰れて隣り合わせに雑魚寝をしようと、警戒心を抱くこともないほど安心できる存在だった。

友だちよりも心を許せる男友だちだったはずなのに。

(私は……、征司と、友だち関係でいたいんだよ……!)

「ハア……、く……ふんツ……」

征司の激しいキスに翻弄されて、朱莉の息が乱れる。

「……朱莉」

唇を離れた征司が、眼鏡の奥から朱莉を見つめる。今になって、彼が眼鏡を外さないままキスを

していたことに気づいた。

「なに……、泣いてんだよ……」

「泣いて……なんか……」

「半べそかいて、強がんな」

途切れがちに漏れる喘ぎだけなら、征司の気持ちは昂つただろう。だが、朱莉の喘ぎには嗚咽が混じっていた。そのせいで、征司は心配そうな目をしている。

征司は頭を撫でるように朱莉の前髪を何度も掻き上げ、彼女を見つめて苦笑いする。

その笑みは、どこか寂しそうだっただけ。

「泣くほど、嫌か？」

朱莉は征司を見つめたまま、滲んだ涙を拭うことなく首を横に振る。

この歳になって、友だちにキスをされたくらいで泣くのはおかしいのかもしれない。男女の関係だって、もっと上手くこなして然るべき年齢だ。それも相手は、話せば分かる友だちではないか。考えすぎて、感傷的になりすぎているのかもしれない。

この状況が泣くほど嫌なわけではない。でも、どうしても確認しなくてはいけないことがある。それを尋ねる前に、朱莉は両手で征司の眼鏡をゆっくりと外した。

「征司……、私と、セックスしたいの？」

実にストレートな質問だった。こんな特別な状況でなければ、なかなか口にはできない。

「したくなかったら、せっかくのハンバーグ中絶して押し倒すはうがないだろう」

「大好きなハンバーグよりは上か……。食欲より性欲とは、あんたもやっぱり男だったんだね」  
「当たり前だっ、あほっ」

征司は朱莉の額をべしりと叩く。朱莉がアハハと笑ったことで場の空気はわずかに和んだが、それも長くは続かなかった。

「じゃあ、……。私のことは？　好き？」

「……朱莉」

「友だちとして、つて意味で充分だよ。……。好きなのかどうかだけ教えて。……。私は、私のことを好きだつて言ってくれる人じゃないと、……。セックスなんてしたくない。——知ってるでしょ？」  
ひときわ小さくなつた最後の言葉に、一瞬、征司の目が戸惑う。最初こそ一気に押して関係を進めてしまふような勢いだったが、朱莉の真剣な目を見て考えを変えたようだ。

「ああ、知ってるよ……」

「私は、征司が好きだよ。……。大事な大事な友だちだもん。だから、征司が『お試ししよう』つて言うなら、してもいい。でも、私が好きなんじゃなく、ただ、身体の関係が欲しいだけで言ってるなら、お試しはしない」

条件を口にした朱莉は、眼鏡を持った手で、征司の頭をつついた。

「だいたいねえ、私が『してもいいよ』つて言わなきゃ、ただの暴行じゃないのっ。デリカシーないぞっ」

「すまん」

「で？　どうなの？」

朱莉はたつぷり優越感を含んだ態度で征司を見上げる。眼鏡を取り上げたが、距離が近いので、彼女の表情は確認できてははずだ。

征司は口角を上げ、お返しとばかりに朱莉の頭を小突いた。

「さつきからなに聞いてんだよ。お前にしか欲情できないんだ、つて言ってるだろう」

「男は、好きな女じゃなくても欲情できるじゃない」

「屁理屈ばつかだな、お前」

「そうだけど？　——こんな女は、嫌なの？」

「いや、お前らしいよ。そんなところも……。好きだ」

照れくさそうに吹きながら、征司の顔が近づいてくる。

唇が触れる直前、朱莉は哀しげに微笑んだ。

「……なら、……。いいよ」

許可が下りてすぐ、征司の唇はさつきよりも情熱的に朱莉の唇を奪う。唇同士を擦り合わせ、吸いつき、舌を絡めて根元からしゃぶりつく。

時折、悪戯をするように舌先を甘噛みされ、朱莉はそのたびにピクリと震える。

唇を合わせたまま何度も顔の向きを変え、朱莉は征司の動きに合わせて彼の唇に吸いついた。控えめながら自ら舌を出して応えているうちに夢中になってしまい、呑み込みきれなかった涎が、唇の端に流れ落ちた。

朱莉はさりげなく拭き取るうと手を上げる。しかしその手を征司が掴み、クスリと笑った。

「拭くなよ。キスに夢中になった朱莉なんて初めてだ。もつと見せろ」

貪り合ったキスの余韻を残すように、唾液が銀糸になってふたりの唇を繋ぐ。普通の状態で唾液など垂らせば、だらしなく見えるだけだ。だが、こんなときは、なぜかエロティックに見える。

「み、見えてないくせに……」

「お前が眼鏡を取り上げるからだろう。それに、全然見えてないわけじゃない」

手にしていた征司の眼鏡を取られそうになり、朱莉は「あっ！」と慌てた声を上げて、彼の手から逃げようと身をよじる。

眼鏡を返したくない理由を察したらしく、征司はクスリと微笑んだ。

「……恥ずかしいか？ 見られるの……」

「分かっているなら、聞かないだよ」

恥ずかしかったり、照れくさかったり——征司に顔を見られたくないとき、朱莉は征司から眼鏡を取り上げる。これは、朱莉の癖だった。

本来ならこんな関係にはなり得ない友だちに、性行為に夢中になる自分の姿など見られたくない。そんな気持ちが大きかった。

「かけないから、返せ。握り潰されたら困るだろ」

朱莉の手から眼鏡を取り、征司はベッドサイドのテーブルの上にそれを置いて、改めて顔を近づけた。

「感じる顔、見られたくないんだな？」

「そんな顔、させられると思ってるんだ？」

征司はチュッと可愛い音を立てながらキスをして、「させたいな」と嬉しそうに囁く。

させる、と自信を持って口にするのではなく、させたいと願望を告げられて、朱莉はくすぐったい気持ちでいっぱいになる。

「させてみて……」

両手で征司の頭を抱くと、より一層激しい口づけの音が寝室に響いた。

こんな場面ではあるが、つい「キス、しつこいぞー」などとからかいたくなる。それほど、征司は朱莉の唇を離そうとはしなかった。

(……征司、キス上手い……)

そんなことを思ってしまう自分が、なんとなく悔しい。だからといって、リードされることが嫌なのではなかった。

征司のキスが上手いのは、彼がこの行為に慣れているからだろうか。

(最近是谁かと付き合っている気配もなかったくせに、……いつ、こんなに上手くなったんだろ……)

朱莉が知る限り、征司は飲み会などでお持ち帰りをする男ではない。彼女らしき存在がいたのも、大学の頃までではなかったか。

それも、本当に付き合っているのか、それとも噂だけなのか分からなかった。気がつくともそんな

気配はなくなっていた程度の話である。征司本人が望む望まないにかかわらず、好意を寄せる女性は周囲にいくらでもいたので、そんなふうに見えていたのかもしれない。

だとしたら、どこでこんなことを学んだのだろう。

「……こら」

考え事をしてっていると、いつ離れるのか心配になるほど吸いついていた征司の唇が、かすかに浮く。うつすらと開いた目に、眉を寄せた彼が映った。

「なんか、考え事してるだろう」

「なんで？」

「舌の動きが遅くなってきたから」

「なによそれ。征司がキスばっかするから、唇が疲れただけよっ」

朱莉は戸惑い<sup>とま</sup>をキスのせいにして、責任を征司になすりつける。頭のひとつでも小突かれるかと予想していたのだが、彼は目の前でクスリと笑った。

「……しようがねーだろ？ 朱莉の唇、気持ちよくてしようがないんだから」

（ちよっ……、反則）

今の言葉で、朱莉の胸は驚くほど高鳴ってしまった。同時に、自分を満足させようと征司が気遣ってくれたようにも感じ、朱莉は少し悔しくなる。

（私の唇って、気持ちいいの？ ……本当に？）

朱莉の気持ちを読んだわけではないだろうが、本当だと言わんばかりにタイミングよく征司の唇

が重なった。

（——征司の唇も、気持ちいいよ……）

唇を合わせたまま、征司の片手が朱莉のブラウスのボタンを外し始める。

（片手で外すとか、生意気ーっ）

さらに背中へ回り込む手がブラジャーのホックを外した。

（ちよっとお、見もしないで片手でホック外しちゃうとか、どんだけ慣れてんのよお！）

征司のやることにいちいちチェックを入れていると、ふいに、舌先をカリッと嘸<sup>か</sup>まれた。さつきまでの甘嘸<sup>あま</sup>みとは違って、少々痛い。

「こら朱莉、手え、よけろっ」

文句を言っただけでやろうかと考えた朱莉だが、それよりも先に征司から文句が出る。

「へ？」

「へ？ じゃねーって、手だよ、手え」

言われて気づく。ブラウスを広げ、ブラジャーを取ろうとしていた征司に反抗するように、朱莉は両腕で胸を押さえてしまっていた。

「あ……、ごめ……」

「ははあ、恥ずかしいんだな？」

「うっ、うるさいなあっ」

恥ずかしくないはずではないか。

こうして征司に服を脱がされることも、裸を見られることも、――ましてや、抱き合う日がくるなんて、今まで考えたことなどなかったのだから。

心の中でチェックを入れてしまうのだって、精一杯の照れ隠しだというのに。

朱莉の気持ちは、きっと征司にも伝わっている。だが彼は朱莉の腕をひよいとよけ、ニヤリと笑んだ。

「でも、だーめっ」

戸惑う間もなくブラウスごとブラジャーが剥ぎ取られる。剥き出しになってしまった胸を隠そうとした両腕は再び掴まれ、顔の横でシートに押し付けられた。

「隠すなよ。もったいない」

彼の唇が首筋に当たる。くすぐったいのか気持ちいいのかわからないまま、唇は鎖骨まで下りてきた。

「朱莉の肌、柔らかいな……」

征司の深くしつとりとした声に、朱莉の胸はドキリとした。彼の唇は鎖骨の辺りをチュツと吸い、胸のふくらみへと落ちていった。

「せ……、征司……」

「ん？」

やんわりと吸いついては移動する征司の唇。左の胸の上部から下へ流れ、次は右側へ移るのだからと予想した瞬間、左のふくらみの頂に吸いつかれた。

「あっ……やあっ……!!」

朱莉は瞬間的な快感に襲われ、肩を揺らす。

「ん？　ここが感じるのか？」

わざとらしく聞きながら、征司の唇は何度も頂を吸っては弾いた。

「ちよっ、ちよっとお……、征司……」

「んー？　気持ちいいだろう？」

「ば、ばかあ……あっ……ん」

感じているとしか思えない反応のせい、征司はその行為をやめない。何度も何度も同じ場所に吸いつかれるうちに、柔らかかった頂が徐々にその存在を主張し始める。

「あっ……、や、だ……もっ……」

顔の横で朱莉の手を押さえていた征司の手が両胸に移動し、乳房を下から持ち上げる。彼が吸いついていた乳首は、そのまま口の中で飴玉をしゃぶるように転がされた。

「やっ……あ、んっ、……征司い……」

じつくりと与えられる乳房への愛撫によって、朱莉の背筋に甘い痺れが走り、全身がゆっくりと疼き始める。

彼女の艶のある声に昂つたのか、征司は手を添えていた右の乳房も、やんわりと、そして大きく揉みしだき始めた。

そうされる内に、じんわりと、自分が女になっていく気がする。



刺激を与えられ、快感を感じることで、忘れかけていた——忘れようとしていた、女としての自分を思い出していくような感覚だった。

「やつぁ……征……、あつ……あつ」

息が乱れる。まだ胸を触られているだけだというのに、こんなに感じてしまっているのだから。征司の唇は右の頂へ移動し、今度は吸いつくのではなく、恥じらうそこを舌先でくすぐり出す。左乳房の刺激に触発されてか、右の頂は早々に興奮を表した。征司は片方だけでは不公平とばかりに、左乳房を指の腹で擦り、時々くりくりと押し潰す。

「ああ……んっ、ふう……」

朱莉はいつの間にか、文句を言うこともできなくなっていた。

(……やだ、気持ちいい……)

気づかぬ間に征司の頭に両手を添え、まるで感じていることを伝えるかのように彼の髪を乱していた。

そうやって朱莉が快感を伝えると、彼が乳首に与えてくる刺激も強いもの変わっていった。

「……征っ……、強く、掴んじゃ……、ダメッ……あつ……」

揉み込まれる乳房がわずかに痛む。しかし彼が興奮のあまり力を入れたことが分かるため、朱莉の気持ちも高まっていった。

「朱莉は……胸も気持ちいいな……」

そう褒めてくれる征司の声は、先ほど肌の柔らかさを褒めてくれたときよりはるかに色づぼく、

彼の昂りを感じさせる。

「征……司……い」

征司に性的な意味での男を感じたのは、これが初めてだった。

友だちである彼とキスをすることも、服を脱がされることも、裸を見られることも。ついさっきまで、そのすべてが恥ずかしくてしょうがなかったというのに。

今はどうだろう。

恥ずかしくなくなったわけではないが、まったく違う感情が生まれている。

(——もっと、征司に触ってほしい……)

その手で、もつともつと自分に触れてほしい。もつと感じさせてほしい。そんなことを考えてしまっ。

そんな朱莉の気持ちを讀んだかのように、征司の手は乳房から腰、そして腹部をまんべんなく撫でまわす。乳首を甘噛みされ、舌で乳房の丸みをなぞられると、朱莉は悶えた。

「やつ……ああ……あんっ、征っ……!」

徐々に喘ぎ声が抑えきれなくなる。

戸惑い、荒い息を吐く朱莉の唇に、征司の唇が触れる。薄く目を開くと彼と視線がぶつかった。朱莉を見つめる瞳と、ふっと微笑む表情は、彼女の脳までとしかた。

「もう、恥ずかしくないか……? 朱莉」

「征司……」

「全部、脱がせても大丈夫か？」

彼の言葉に、胸がじわりと熱くなる。征司は待っていてくれたのだ。恥ずかしがり身を固くする朱莉が、彼の愛撫あいぶに慣れて素直に感じてくれる状態になるまで。

数少ない性経験の中でもらった覚えのない優しさを、この十年来の友だちに感じてしまう。それが、よいことなのか、悪いことなのか、朱莉にはまだ分からない。けれど……

「いいよ……、征司」

征司にならば、自分を晒さらしてもいい。

朱莉は、彼を受け入れることに迷いを感じなくなっていた。

許可が出ると、征司の行動は早かった。

自らもシャツを脱いでから、唇で朱莉の腹部をなぞり、スカートに手をかける。この期きに及んで足をびったりと閉じているのもおかしいかと、朱莉は膝の力を緩ゆるめ、そっと両足の間隔かんかくを広げた。

一枚一枚順序よく脱がされていくのかと思っていたのだが、スカートと共に下着も脱がされてしまった。そんな征司に、朱莉は小さく笑う。

「せっかち」

手は忙せわしく動いているというのに、征司の唇はゆっくりと朱莉の臍へそを舌でなぞっている。彼の頭をぼんぼんと叩くと、笑いのまじった吐息といきが腹部をくすぐった。

「ゆっくり脱がしてっさ、途中で朱莉の気が変わったら困るだろう？」

「うっそだー、私の裸に興奮して余裕ないんでしょー？」

「糸いとまとわぬ姿にされてしまったことへの照れで、そんな言葉が口から出る。なんだよ、その勘違い、などと返されるであろうと予想を立てていたのだが——彼は自分のジーンズに手をかけ、「当たり前」と言いながらそれを脱ぎ捨てた。

（す、素直すぎない？）

こんな態度を取られると、ふざけることもできないではないか。

未経験ではないし、このあとどういった行為が待っているのかくらい分かっている。だからこそ朱莉はこそりと尋ねた。

「せ、征司……。あかさ、シャワー、あびてないからね……」

「んー？ いいよ、その辺はお互い様だし、俺は気にならない。朱莉の匂いがして、かえって嬉うれしー」

「へっ、変態っ」

「あとで一緒に風呂入ろうな」

「調子に乗らないのっ」

朱莉は安心しつつも、再び征司の頭を叩いてやろうかと考える。しかし次の瞬間、与えられた快樂らくによって、彼の髪をぐっと掴んでしまった。

「あっ……！ー」

足の付け根に落ちた征司の唇は恥丘ちきゅうをたどり、内腿うちももを両手で押し広げながら花芯かしんへと落ちた。